

エリカ (M) 「これから始まるのは、生ボイスドラマコーナーです！」

エリカ (M) 「どこかにある『カルモア学園』にノール先輩とわたし、候補生エリカが学生として潜入して、学園にはびこる悪臭の元を消臭して、世界から悪臭をなくすために戦うと言うお話です」

エリカ (M) 「タイトルは——『デオフェアリーノールと秘密の部室』」

エリカ (M) 「これは、愛と勇気と真実と消臭の物語である」

エリカ (M) 「出演…デオフェアリー・ノール、秋山えりか、スタッフ先輩、カメラマンさん、社外秘さん、かみじよ——」

エリカ (M) 「脚本、上城友幸」

エリカ (M) 「では、物語……スタート!!」

一拍の間

(N) 「前回までのあらすじ」

「悪臭17人衆と対決して、日々カルモア学園を消臭してきたデオフェアリーノールと候補生エリカ、そして新入部員のえり。

「一度消臭して、復活した悪臭四天王の一人、アンモニアのアンを探していたノールたちは、四天王のリーダーのメチルメルカプタンのメリーとジオスミンのジオに遭遇した。

「戦いの末、ジオを消臭したもののメリーは無傷で残った。そして、驚くえりに向かってメリーは言った——『姉さん』と……」

一拍の間

ノール（M） 「『デオフェアリー・ノールと秘密の部室』
スメル13『デオフェアリー』」

ノール（M） 「わたしの名前はノール。どこにでもいる、普通の
デオフェアリーなの！この世界から悪いにおいをなくす
ため、カルモア学園の学生になって、人間の世界を見守
っているんだ」

一拍の間

エリカ 「お姉様……なにがなんだか、わかりません！」

ノール（M） 「この、ノールのことを『お姉様』と呼ぶ子は、
後輩のエリカ。実はデオフェアリー候補生なんだけど、
ノールと一緒にカルモア学園で消臭の任務についている
んだよね」

えり「はうー……」

ノール(M)「こっちの、あざといロリっ子は、後輩のえり。どんな子なのか、よくわかんなかったのが——もつとわかんなくなった」

メリー「ほら、説明してあげたら？——姉さん」

ノール(M)「そう。この悪臭四天王、メチルメルカプタンのメリーがえりのことを『姉さん』って呼んだから。でも、えりはとくに否定をするわけでもなく……もおー！わけわかんない！」

一拍の間

えり「うう、メリーがいじわるですよ」

メリー「ひさしぶりに会った妹にむかって、ご挨拶ね」

えり「えうう〜」

ノール「こらあ！ 思わせぶりな会話禁止!!」

エリカ「そうですよ！ えり、いったいどうしちやったの!?!」

一拍の間

えり「いままで、お話ししてなかったんですけど……」

「ノール先輩が、学生の姿で学園にいるように。わたしも、

正体を隠していたんです〜」

ノール「正体って……えりの正体ってなんなの？」

えり「わたしは……わたしは——悪臭軍団の総帥……」

エチルメルカプタンのエリーです」

SE..悪臭登場

エリカ「エチル——メルカプタン？」

ノール「エリカがしらないのも無理ないよ。デオアリーナの18枚のカードには、入っていない悪臭成分だから」

エリカ「お姉様……いったい、どんな悪臭なんですか？」

ノール「――地球上で、一番臭い物質」

エリカ「……………え？」

ノール「別名エタンチオール。ギネスブックにも認定された、

世界一臭い悪臭成分――それがエチルメルカプタンだよ」

一拍の間

えり「にやあく、そんなにほめられたら照れてしまいますう」

ノール「ほめてないからねっ!!」

一拍の間

エリカ「そんなに臭いんですか？」

ノール「某大学の研究室で、25ミリリットルの試薬ビンを落つこととして割っちゃって——町全体が臭くなったって言う話がまことしやかに伝わっているくらい」

エリカ「25ミリリットルって、大きじ2杯弱ですよね？」

それで、町中臭くなるんですか!？」

ノール「あと、世界一臭い食べ物『シュールストレミング』にも含まれてる」

エリカ「某平成ノールが『すがすがしいニオイ』って言ったた、アレですか」

ノール「あの子、変わってるからねえ。芳香剤とか好きだし」

SE…足音

バスメル「おお、ノールちゃん!!」

ノール「なに、今日もバスメルタイムあるのっ!？」

エリカ「お姉様変身してるのに、遠慮無くできてましたね」

ノール(M) 「そんなわけであ…この、いきなりうつつうしい、キラキラ二枚目のお兄ちゃんは『バスメル王子』」
ノール(M) 「今日は尺がたりないので、これで説明おしまい」

一拍の間

バスメル 「今日のノールちゃんは、ずいぶんと小さいんだね」
ノール 「自分で言うのもなんだけど。普通のひとは、日によって小さくなったり大きくなったりしないとおもう」
バスメル 「ボクは小柄な子が好きなんだ——ボクの胸に受け止めやすいからね」
ノール 「身長6・5センチは『小柄』の枠に入るのかな？」
エリカ 「ものには限度つてものがありますよね」

一拍の間

えり 「ふわあ…：…いつのまにか王子様が来ていてびっくりですよう」

ノール「だから、『様』いらないうて。『王子』でいいよ」

メリー「麗しきご尊顔を拝し、恐悦至極ですわ——王子様」

エリカ「え？ どうしちやったんですか？」

メリー「こちらにいらっしやるのは——悪臭王国の国王『ゲスタ

ンク三世陛下』のご嫡男——バスマル殿下よ」

ノール・エリカ「「えーーーーーっ!?!」」

ノール「ほ、本当に王子だったの、バスマル王子!？」

エリカ「たしかに、なんの疑いもなく『王子』って呼んでました

けど……」

ノール「全然、わかんなかった——だって、ニオイしないじゃん」

エリカ「むしろバラの香りがするじゃないですか……あれだけ話

してるのに、ぜんぜん気がつかなかったですねえ」

バスマル「言葉って案外不完全なものだな……この想いを伝えき

れないなんて」

ノール「想いどころか、何者かもつたわってなかったよ」

一拍の間

メリー「姉さん、わたしの邪魔をしにきたの？」

えり「ちがいますよお、なんだか面白そうだったからです」

メリー「嘘。わたしが王子様を追って、17人衆を動かしたことを――総帥の姉さんがわからないわけ、ないんだから」

えり「べつに、メリーちゃんのこととは関係ないですよ」

メリー「邪魔しないで、姉さん。王子様の心を奪った、そのデオ

フェアリーを倒せば――王子様は、きっとわたしに振り

向いてくれる」

えり「はわー、うまく行くといいですねえ」

メリー「余裕ね、姉さん……わたしと違って、国王陛下お気に

入りのお姉様は――王子様の許嫁だもんね」

エリカ「へっ!?!」

ノール「許嫁って……婚約者ってこと!?!」

メリー「悪臭王家の姫になる――メルカプタン家の女性なら、

誰もが夢見ること」

ノール「なんか、臭そうな家だよね……」

エリカ「聞こえますよ、お姉様！」

メリー「だからわたしは軍団に入り、がんばって四天王と呼ばれるまでになった」

「でも、姉さんは——本ばかり呼んでた姉さんは——

軍団に入るや……国王陛下に認められ、総帥になった」

えり「はうう、たまたまですよ」

メリー「姉さんは……っ！ 姉さんは、いつだってそう！

いつもわたしの一步前にいて、わたしの上において、

わたしの行く道を塞いでいくっ!! そんな姉さんに、

王子様だけは……わたし、王子様だけは譲れない！」

えり「うーん……でも、王子様の心はこちらにも向いていない
みたいですよ？」

一拍の間

バスメル「僕の愛は変わらない——とこしえにノールちゃんを
愛するよ」

エリカ「ぶれませんね、この人も。どっちをとつても、お姉様
よりいい気がするんですけど」

ノール「あーもおくっ！ うるさいなあ！」

一拍の間

エリカ「それで……どうするんですか、お姉様？（小声）」

ノール「17人衆のリーダーと悪臭の総帥——それに、王子かあ」

エリカ「多勢に無勢……ですよね（小声）」

ノール「夢の力はチャージしたから……3人ならなんとか……」

一拍の間

ノリゾウ「いよお！ 久しぶりだなア!!」

エリカ「うえっ!?!」

ノール「その、オヤジ臭さは……ネナールのかみじょーっ!!」

ノリゾウ「ノリゾウだ！ がはははは！ お主も相変わらず、

昭和臭いのお！」

ノール「だから、昭和って言うなーっ!!」

一拍の間

エリカ「復活——した、んですか？」

ノリゾウ「まあ、悪臭源のオヤジには、ことかかんからな」

ノール「くそー、やっぱりかみじょーを消しておけばよかつた」

アン「わたしもいるわよ、かわいいデオフェアリーちゃん」

ノール「あー！ ボインがいたーっ!!」

エリカ「アンモニアも来たってコトは……四天王の3人が、揃っ

たってことですか？」

ノール「ジオスミン以外、かあ」

ノリゾウ「む？ オイコラ！ ジオスミンの坊主はどうした？

メリー、お主と一緒にでは無かったのか？」

メリー「さっき、そのデオフェアリーに消されたのよ」

ノリゾウ「そうかそうか。ハハハ！ 相変わらず、やりおるわ！」

一拍の間

ノール「一気に場の雰囲気が変わったよね」

エリカ「連ドラのシリアスシーンに、いきなりバラエティ芸人が

乱入した感じですね」

ノリゾウ「まあ、よいわさ。復活するついでに、みんな引っ張っ

てきたからな」

ノール「え？」

エリカ「お、お姉様……！ ノネナールの後ろっ!!」

SE…悪臭軍団登場

エリカ「あ、ああああ……たくさんいますよ、お姉様」

ノール「アセトアルデヒド、硫化水素、ノルマル酪酸、トリメチ

ルアミン、ピリジン、二硫化メチル、カプロン酸……」

ノリゾウ「それだけではないぞ。酢酸のサキ、インドールのイル

ミ、硫化メチルのミチ、プロピオン酸のフサコ、イソ吉

草酸のイソ吉——17人衆のうち、番組にぞびれた奴

らも、まとめて連れてきてやったわい」

エリカ「どうするんですか？　こんなの、消しきれませんよね？」

ノール「こまったね」

エリカ「なんで、そんなに冷静なんですか!!　大ピンチですよ!!」

一拍の間

えり「あのう、ノール先輩？　エリカ先輩？」

ノール「……なに？」

えり「降伏、しませんか？」

エリカ「降伏……」

えり「こちらは悪臭17人衆がほとんど揃ってます。ジオスミンのジオだけが、欠けた状態なんですよ」

アン「それにね——結局、人間がいるかぎり——好き勝手に生かしているかぎり、悪臭の元を生み出して、わたしたちが活躍する場所ができるわけ」

「人間を消さない限り——地球から全部の生き物を消さない限り——わたしたち悪臭は、いつでも現れる。一度消したって、簡単に復活できる」

アン「あなたのやっている『消臭』って——結局は、無駄なことじゃないかしら？」

えり「ここで戦うのも、結局ムダな戦いになりますよ。降伏してください、先輩」

一拍の間

ノール「……エリカ、覚悟はいい？」

エリカ「（ため息）そうくると思ってました、お姉様」

ノール「これから、わたしの最大の技を使うから——呪文を唱え
終わるまで、背中まかせたからね」

エリカ「まかされました！ 行きましょう、お姉様！」

アン「うふふ、あなたのそういうところ——嫌いじゃないわ」
メリー「おしゃべりは、ここまでね——17人衆、行きなさいっ
！」

BGM…戦闘っぽいBGM

※ノールが呪文を詠唱する間、エリカの打撃音が
断続的に響く。

ノール「——汝らの身は我が元に、我が身は汝らの寄る^{よるべ}辺となり
て、石竹色^{せきちくいろ}の光をもちて、導かん」

ノール「来たれ！ 穏やかに、目の前に、我ら消臭の定めに従い、
我が呼びかけに応えよ！」

ノール「デオフェアリー・ノールがマイクロゲルの誓いにより、
命ずる——おいでませっ!!（最後は大声で）」

SE…召還成功&結界を展開する音

メリー「な、なにこれ!？」

えり「は、はわわーっ!？」

ノリヅウ「なんじゃーいっ!？」

BGM、カットオフ

エリカ「――なにが、おこったの？ この霧……! (息をのむ)

お姉様!？」

一拍の間

エリカ「お姉様!？ どこにいるんですか、お姉様!？」

エリカ「――あ」

SE…駆け寄る足音

エリカ「お姉様っ!!」

ノールA「うわあ！ なにごとでのーるう!?!」

エリカ「……へ?」

ノールA「いきなり大声を出したら、びっくりするでのーる!」

エリカ「お……おねえさま? (困惑)」

ノールA「わたしに妹はいないのでのーる。ひとちがいならぬ、

妖精違いでのーる」

エリカ「……なんだろう。この、安物のマスコットキャラみたい

なしゃべり方は」

ノールA「なんか言ったでのーる? (じろっ)」

エリカ「なんでもないです! では、失礼します!」

ノールA「気をつけていくでのーる」

SE…足音

エリカ「なんだったんだろ、今の……?」

エリカ「……あ!」

SE…足音

エリカ「こんどこそ——お姉様っ！」

ノールB「なんやねーん!？」

エリカ「……は？」

ノールB「びっくりしたやないかい！」

エリカ「え、と……お姉様、じゃ……ないですよね？」

ノールB「ウチに妹はおらへんでー」

エリカ「……なんか、大阪を馬鹿にされてる気がするんだけど」

ノールB「ウチはデオヘアリー・ノールでおまどすまんねん。」

あんじょー、よろしゅーたのんますー」

エリカ「うっわー、殴りたい。すつごく、殴りたい」

ノールB「なんか、目えこわいわー。かなんわ、ホンマ……」

ほんで、あんさんは何してけつかる？」

エリカ「けつかる!？」（軽く深呼吸）——あの、あなたじゃない

デオフェアリーをさがしているんです」

ノールB「そうでつかー。他のデオヘアリーにはあつてへんわ」

エリカ「じゃあ、探しに行きます！ 失礼します！」

ノールB「ほな、きばりやー」

SE..足音

エリカ「もく、ストレスがたまるなあ……お姉様と同じ顔って
ところが、イライラを倍増……あ！」

SE..足音

エリカ「あの、お姉様ですか？」

ノールC「はい？」

エリカ「ちがひ、ますかね？」

ノールC「申し訳ございません、わたしに妹はいないのですが…

…誰か、お探ですか？」

エリカ「え？ ……あ、いや、その……あなたじゃないデオフェ

アリーを捜しているんですけど……」

ノールC「そうですか。まだ、他のデオフェアリーのかたにはお会いしてなくて……お役に立てずに、ごめんなさい」

エリカ「いえいえ！ あやまらないでください！」

ノールC「候補生のかたですか？」

エリカ「あ、ハイ。そうです」

ノールC「修行は厳しいけど、いつか必ず実を結ぶときがきます

から。からだに気をつけて、がんばってくださいね」

エリカ「——えーっ!! こっちのほうがいいく！ うちのと、

とりかえてーっ!!」

一拍の間

ノール「……こらあゝゝゝっ!! (大声)」

エリカ「お姉様!! 心配して、ずっと探してたんですよ!!」

ノール「うそつけーっ！ こっちでいいって言ってたじゃん!!」

エリカ「そんなことより……いったい、何が起こったんですか!?!」

ノール「他の世界でがんばっているデオフェアリーを、片っ端から召還してみた。たぶん、100人はいる」

エリカ「100人!？」

ノール「これが、ノールの最大奥義——『デオドア・カーニバル』だよっ!!」

エリカ「え、で、でも……みんなお姉様と同じ顔してるのは、なんでなんですか？」

ノール「だから、いつも言ってるじゃん。——『どこにでもいる、普通のデオフェアリー』って」

エリカ「そういう意味だったんですか、アレ!？」

一拍の間

ノール「形成逆転だね、えり」

えり「はわく！先輩だらけですう〜！」

ノール「そんなわけで、ノールの使命は、悪臭を消すこと」

「臭いニオイは元から——そんなこと、関係ない」

ノール「臭かったら、消す。ニオイが復活したら、また消す。

人間のくらしのなかで、悪臭が生まれるなら——生まれ
た端から、どんどん消す」

「たとえ、微量では良いにおいでも——濃度が上がって、
臭くなったら即座に消す」

「それが、デオフェアリーの役目……ニオイを消して、
人間が気持ちの良い暮らしを送るために手助けする」

「無駄な消臭なんて、ノールにはない！」

一拍の間

バスメル「ボクはノールちゃんの——そんな無臭なところにひか
れたんだ」

「ニオイをニオイでごまかすものが多い中——無臭に
こだわる、そんなところが好きなんだ」

メリー「王子様……」

えり「はううう、やっぱりステキですうう」

ノール「じゃあ——いくよっ、みんな！」

ノール「右手に集いし、聖なる匂い♪」

ノール全員「右手に集いし、聖なる匂い♪」

ノール「左手に集いし愛のメデイすん☆」

ノール全員「左手に集いし愛のメデイすん☆」

ノール「たのしかった、なつやすみっ！」

ノール全員「たのしかった、なつやすみっ！」

ノール「両手をあわせて〜〜…いっきま〜〜す!!」

ノール全員「デオ・デオドアーツ！」

SE…超デオ・デオドアアの音

悪臭一同「うわー、だめだー!! (棒読み)」

バスメル「では、いつかまたあおう！ 恋のデオフェアリー!!」

SE…消臭タイムの消臭音

ノール「すつきり〜！（消臭タイム口調で）」

一拍の間

エリカ（N）「こうして、カルモア学園のすべての悪臭は消臭された」

エリカ（N）「そして、それから3日が経った……」

SE…ノックの音

SE…ドアを開ける音

ノール「ただいまー」

エリカ「あ、お帰りなさい、お姉様！」

「ていうか、どちらへ？」

ノール「妖精界、帰ってた。呼び出されて、事情を聞かれた」
エリカ「え？」

ノール「『デオドア・カーニバル』は次元をねじ曲げてみんなを呼び出す技だから——一歩間違えると、2、3個宇宙が吹っ飛んじゃうんだよね」

エリカ「さらっと、とんでもないこといわないでください」

ノール「そんなわけで——担当交代になった」

エリカ「ああ……左遷されたわけですね」

ノール「違うよ！ ノールはお褒めの言葉をいただいて、栄転がきまったんだよ！」

エリカ「そうなんですか。感謝状とかもらえたりしたんですか？」

ノール「よくわからないけど、始末書いっぱいかかされた」

エリカ「ダメじゃないですか！？」で、どちらへ異動なんですか？」

ノール「『株式会社カルモア』ってところに行くんだって。」

エリカ「会社、ですか？」

ノール「うん。消臭の会社。なんかね、ノールの力を分析して、

手軽に使える商品をつくるんだーって言ってた」

ノール「つまり、ノールが販売されるってことだよ。やっぱり、おしゃれなお店とか置かれるのかなあ？」

エリカ「ドンキホーテとか釣具屋さんとか、イメージですよね。

あと、コスプレ美容室とか」

ノール「なんで、そんな具体的なわけ!？」

エリカ「この学園は、どうするんですか？」

ノール「後任のノールが来るって言った。新人みたいだから、

しばらくはサポートすることになるかもしれない」

エリカ「そうなんですネ……」

ノール「エリカはどうする？」

エリカ「え？」

ノール「ここに残って、あたらしいノールのサポートをする？

それとも、ノールについてくる？」

一拍の間。

エリカ「もちろん、ついていきますよ」

エリカ「新しいデオフェアリーも見てみたいけど、エリカの

デオフェアリーは、お姉様ですから」

ノール「エリカ……（感動）——聞いたよ（ニヤリ）」

エリカ「な……なんですか、お姉様？」

ノール「そんなこともあるのかと！ お仕事の話をつけておいた」

エリカ「は？」

ノール「ノールはできる女だから。凄腕えーぎよーってヤツ？」

エリカ「ぐ、具体的には……なにを？」

ノール「今後できるであろう、ノールの商品を販売する為に……

いろいろやる」

エリカ「いろいろ、って」

ノール「いろいろは、いろいろ。生放送でたり。コスプレしたり。

コミケでチラシ配ったり」

エリカ「残ろうかなあ……」

ノール「もう遅い。退学届け、出しておいた」

エリカ「なんてことするんですか、お姉様!？」

ノール「つべこべいわない！ ほら、いくよっ！」

エリカ「うー、あー……わかりました！ どこまでもついていき

ます！」

ノール「どこまでも着いてくるとうっとうしいから、ほどほどでいいよ」

エリカ「ひどっ!!」

一拍の間

エリカ(N) 「こうして、わたしたちはカルモア学園を後にした」

エリカ(N) 「実は——この物語は、今から1年くらい前のお話」

エリカ(N) 「株式会社カルモアの技術力でお姉様の消臭パワーをスプレーにした商品ができあがり」

エリカ(N) 「その宣伝で、わたしもいろいろなイベントにでたり、毎週木曜日に生放送に出たり」

エリカ(N) 「そんなわたしと、お店や物販コーナーに並んだ

お姉様の『妹』を、ご覧になったかたも……もしかしたら、いらっしやるかもしれませんね」

エリカ(N) 「かくして！ デオフェアリーノールと秘密の部室。これにて一巻の終わりとさせていただきます!!」

エリカ (N) 「みなさんの快適な暮らしのために、今日は東へ

明日は西へ……!!」

エリカ (N) 「デオフェアリー・ノールの、消臭は——まだまだ、
終わらない……」

一拍の間

エリカ (N) 「漂う悪臭を、なんとする」

エリカ (N) 「芳香剤では、ごまかしきれぬ」

エリカ (N) 「換気扇でも、どうにもならぬ」

エリカ (N) 「マイクログルで、消臭する」

エリカ (N) 「いつでも! どこでも! あなたと、一緒に!」

ノール (N) 「『デオ・デオドアー!』」

おわり。